対人印象に及ぼす自己卑下呈示の効果の規定因

樋口匡貴・川村千賀子・原　郁水・塚脇涼太・深田博己

Factors influencing the effects of self-derogation on interpersonal impressions

Masataka Higuchi, Chikako Kawamura, Ikumi Hara, Ryota Tsukawaki, and Hiromi Fukada

対人印象に及ぼす自己卑下呈示の効果が，送り手の立場によって異なるのかどうかを明らかにするために，大学生209名を対象とした実験を行った。実験は賞賛に対する返答として何らかの自己呈示が行われるというシナリオを用い，実験計画は送り手の立場（上 / 下）×呈示方法（自己卑下呈示 / 自己高揚呈示 / 統制条件）であった。その結果，対人印象の中でも社会的望ましさおよび個人的親しみやすさの次元においては，賞賛に対する自己卑下呈示は，自己高揚呈示よりも高く評価されることが明らかになった。一方，活動性の評価に関しては，賞賛に対する自己卑下呈示はもっとも低い評価となることが示された。送り手の立場によってこのパターンが大きく変わるという結果はみいだされなかった。これまで自己卑下呈示は望ましい印象を与えるのに有効であるとされてきたが，本研究の結果から印象の次元によってはネガティブとなる可能性も存在することが考察された。

キーワード：自己卑下呈示，対人印象，自己高揚呈示，送り手の立場

問題

我々は日常生活の様々な場面で，自己の否定的な側面について言及したり，優れた側面について積極的な言及を控えたりする場合がある。このような振る舞いは自己卑下呈示と呼ばれる（吉田・浦・黒川，2004）。

この自己卑下呈示についてこれまでにいくつかの研究がなされてきており，概ね日本文化においては自己卑下呈示がよく用いられており，かつ望ましい対人印象をもたらすことが示されてきている。たとえば遠藤（1995）は，欧米では自己の肯定的特徴を描写する言動が多くなされるのに対して，日本では言語的表現において自己の能力のなさを強調した「謙遜」や「謙譲」といった自己卑下的な呈示がよく用いられることを指摘している。また，謙遜について調査した村上・石黒（2005）では，7割近くの人が対人関係において謙遜が望ましい振る舞いだと評価していることを明らかにしており，謙遜が強く支持されていることを示した。さらに，自己卑下呈示は，自己の優れた側面について積極的に主張することで他者から評価を得ようとする呈示方法である自己高揚呈示と対比的に扱われることが多く，日本文化において，自己卑下呈示は自己高揚呈示よりも好意に関して受

け手に高い印象を与えるということが，これまでの研究で示されている（村本・山口，1994；吉田・加来・古城，1982）。

しかし近年，自己卑下呈示が必ずしも有効な呈示方略であるとは限らないことも指摘されている。稲富・山口（2004）は，賞讃に対する自己卑下呈示を題材として検討を行った結果，賞賛内容が客観的な場合（試験合格に対する賞賛）には，自己卑下呈示を行うよりも単なる謝辞を述べる方が送り手の印象が良くなることを示している。

さらに「あえて低く評価して呈示する言語行動」という定義の基に，謙遜表現について国語学的な視点からその使用状況を検討した大野（2006）は，受け手が目下の者よりも目上や同等の者の場合に，謙遜表現を頻繁に使用する傾向があることを明らかにしている。謙遜表現の使用頻度が受け手との関係性に応じて異なるということから，送り手は受け手との関係によって謙遜表現が適切なコミュニケーション内容であるかどうかを判断していると推測される。

これらの結果から，これまで日本においては望ましい印象を与えるとされてきた自己卑下呈示が，ネガティブな印象を与える可能性も示唆される。そこで本研究では，自己卑下呈示の効果の規定因についての探索的研究として，自己卑下呈示の送り手と受け手の上下関係の要因を取り上げ，自己卑下呈示の送り手の立場が，受け手が抱く印象に与える影響を検討することを目的とした。その際，稲富・山口（2004）で統制条件として用いられていた「賞賛に対する謝辞」は，「ありがとう」という素直な感謝の表明が好印象を与え，統制条件としては不適切であると考えられるため，本研究では自己卑下呈示の効果を検討する統制条件として，送り手についての情報のみを与える自己開示を用いることとした。また，上下関係を要因とした場合の自己卑下呈示の効果を，呈示方法の面で相対的に検証するため，自己卑下呈示と対比的に用いられることの多い自己高揚呈示も同時に扱った。

方法

実験参加者

大学生 209 名を対象とした実験を行い，そのうちデータに不備のあったものを除く 205 名（男性 66 名，女性 139 名，平均年齢 20.62 歳，標準偏差=1.78）を分析の対象とした。

実験計画

送り手の立場 2（目上，目下）×呈示方法 3（自己卑下，自己高揚，統制条件）の 2 要因実験参加者間計画であった。

測定尺度

従属変数は①賞賛に対する送り手の反応（自己卑下，自己高揚，統制条件）に対して受け手が抱く印象，②操作チェックのための上下関係の認知度，③操作チェックのための呈示方法の認知度の 3 種類であった。

受け手が抱く印象に関しては，特性形容詞尺度（林，1978）の形容詞対 20 項目を使用した。1 点から 7 点の 7 段階評定で行い，数値が高くなるほど肯定的内容の形容詞となり，印象が高くなるよう適宜逆転した。これらの 20 項目に対して，主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い，共通性が.20 以下の項目，2 因子以上に.40 以上負荷している項目，因子負荷量が.40 未満の項目に該

当する項目を削除した。最終的に社会的望ましさ因子（項目例: 慎重な，分別のある; 6 項目，α = .85），活動性因子（項目例: 意欲的な，堂々とした; 3 項目，α=.76），個人的親しみやすさ因子（項目例: 親しみやすい，人なつっこい; 4 項目，α=.72）の 3 因子が採択され（3 因子の累積寄与率は 52.82%），各因子ごとの加算平均値を今後の分析に用いた。

操作チェックのための上下関係の認知度に関しては，形容詞対 3 項目（「目上―目下」「勢力がある―勢力がない」「地位が高い―地位が低い」）を使用した。1 点から 7 点の 7 段階評定で行い，数値が高くなるほど目下であると認知されるよう適宜逆転した。3 項目での信頼性係数は α=.82 と十分であり，3 項目の加算平均値を今後の分析に用いた。

操作チェックのための呈示方法の認知度に関しては，形容詞対 3 項目（「自分を高く見せようとしている―自分を低く見せようとしている」「大げさな―控えめな」「無遠慮な―遠慮がちな」）を使用した。1 点から 7 点の 7 段階評定で行い，数値が高くなるほど自己卑下的な呈示であると認知されるよう適宜逆転した。3 項目での信頼性係数は α=.92 と十分であり，3 項目の加算平均値を今後の分析に用いた。

手続き

集団での質問紙実験を行った。送り手の立場（目上 / 目下）と呈示方法（自己卑下 / 自己高揚 / 統制条件）のそれぞれを操作したシナリオを無作為に配布した。シナリオの基本的な内容は賞賛に対する自己卑下呈示場面とし，具体的には「履修単位の成績開示でいつもより優秀な成績だった」というものであった。これは，自己卑下呈示が与える印象が必ずしも良いものではないことを示した稲富・山口（2004）でも扱われており，大野（2006）においても謙遜表現が使用される状況として相手からの「ほめ」の存在が多く報告されていることからの設定である。また賞賛内容について，本研究では特に自己卑下呈示が有効でない場合を明らかにするため，稲富・山口（2004）において自己卑下呈示の印象が低くなるとされた「客観的な賞賛内容」とした。

送り手の立場の操作としては，大学生にとっての身近な上下関係である先輩・後輩関係を用い，目上の送り手を「同じ部活の 2 年上の先輩で，部の主将」とし，目下の送り手を「同じ部活の 2 年下の後輩で，新入部員」とした。また，関係性の要因として重要であると指摘されている「親しさ」は，心理的親密性が中程度のときに自己卑下が生起しやすい（石黒・村上，2007）ことより，受け手にとって送り手は「会ったら会話をする程度の間柄の人物」に揃えた。

呈示方法の操作については，受け手から成績について賞賛されたことに対して，以下のような表現を用いて呈示を行った。自己卑下呈示では，優秀と言われるほど良い成績ではないこと，運が良かっただけだということ，勉強が苦手であることを伝えた。自己高揚呈示では，優秀と言われるほどの良い成績であること，実力があるということ，勉強が得意であることを伝えた。統制条件では，「いつもよりよかった」という事実のみを伝えた。

実験参加者には以上の 6 種類のシナリオのうち 1 つが配布された。シナリオをよく読んだ上で，送り手に対する印象評定，上下関係と呈示方法の認知に関する評定をしてもらい，最後に性別と年齢を記入してもらった。また，調査は任意のものであり，質問紙への回答を拒否することができるということも実験参加者に伝えた上で，同意が得られた参加者に対してのみ調査を実施した。

結果

実験操作の有効性

シナリオにおける送り手の立場の操作および呈示方法の操作の有効性を確認するために，操作チェック用の尺度に関して，条件ごとに平均値及び標準偏差を算出した（送り手の立場に関してはTable 1，呈示方法に関してはTable 2）。上下関係の認知得点に関して，送り手の立場を独立変数とした1要因分散分析を行ったところ，送り手の立場の主効果が有意であり（$F(1,203)=123.26, p<.001$），目上条件の方が目下条件に比べて，より上下関係が上であると認知されていることが示された。

さらに呈示方法の操作については，呈示方法の認知得点に関して呈示方法を独立変数とした1要因分散分析を行ったところ，呈示方法の主効果が有意であった（$F(2,202)=134.68$，$p<.001$）。Tukey法による多重比較の結果，各群間全てに有意差が見られ（$\alpha=.05$），自己卑下条件，統制条件，自己高揚条件の順に，より自己卑下的な呈示方法であると認知されていた。

これらの結果より，本研究での実験操作はいずれも有効であったと言える。

送り手の立場および呈示方法による受け手が抱く印象への影響

受け手が抱く送り手の印象の3因子（社会的望ましさ，活動性，個人的親しみやすさ）それぞれに関して，条件ごとに平均値及び標準偏差を算出した（Table 3）。これらの得点に対して送り手の立場（目上 / 目下）×呈示方法（自己卑下 / 自己高揚 / 統制）の2要因分散分析を行った。

まず社会的望ましさ得点に関して，送り手の立場の主効果（$F(1,199)=18.17$，$p<.001$）と呈示方法の主効果（$F(1,199)=73.78$，$p<.001$）が有意であった。送り手の立場の主効果では，目上条件の方が目下条件よりも社会的望ましさが高く評定された。また呈示方法の主効果では，Tukey法による多重比較の結果，すべての条件間に有意差が見られ（$\alpha=.05$），自己卑下条件，統制条件，自己高揚条件の順に社会的望ましさが高いという結果であった。

次に活動性得点に関しては，呈示方法の主効果（$F(2,199)=56.35$，$p<.001$）および送り手の立場と呈示方法の交互作用効果（$F(2,199)=3.08$，$p<.05$）が有意であった。呈示方法の主効果では，Tukey

Table 1　送り手の立場ごとの操作チェック尺度の平均値（標準偏差）

	目上	目下
n	101	104
上下関係の認知	2.85	4.21
	(0.89)	(0.85)
呈示方法の認知	4.13	3.98
	(1.22)	(1.40)

Table 2　呈示方法ごとの操作チェック尺度の平均値（標準偏差）

	自己卑下	自己高揚	統制
n	70	67	68
上下関係の認知	3.86	3.34	3.34
	(1.10)	(1.00)	(1.14)
呈示方法の認知	5.10	2.72	4.34
	(0.92)	(0.75)	(0.91)

Table 3　各条件における印象得点の平均値（標準偏差）

	目上			目下		
	自己卑下	自己高揚	統制	自己卑下	自己高揚	統制
n	35	31	35	35	36	33
社会的望ましさ	4.89	3.67	4.48	4.47	3.23	4.24
	(0.67)	(0.46)	(0.74)	(0.53)	(0.50)	(0.70)
活動性	4.19	5.31	5.22	4.00	5.57	4.85
	(0.85)	(0.80)	(0.88)	(0.47)	(0.79)	(0.72)
個人的親しみやすさ	4.79	4.27	4.79	4.56	4.10	5.02
	(0.87)	(0.74)	(0.79)	(0.86)	(0.83)	(0.78)

法による多重比較の結果，すべての条件間に有意差が見られ（α=.05），自己高揚条件，統制条件，自己卑下条件の順に活動性が高く評定されていた。

また交互作用の下位検定の結果，統制条件における送り手の立場の単純主効果が有意であり（$F(1,199)=4.02$，$p<.05$），統制条件においては目上条件の方が目下条件よりも活動性が高いという結果であった。さらに，目上条件における呈示方法の単純主効果が有意であり（$F(2,199)=22.69$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較の結果，自己卑下条件と自己高揚条件の間と，自己卑下条件と統制条件の間に有意差が見られた（α=.05）。すなわち目上条件においては，自己高揚条件の方が自己卑下条件よりも高く評定され，統制条件の方が自己卑下条件よりも高く評定されていた。また目下条件においても呈示方法の単純主効果が有意であり（$F(2,199)=37.85$，$p<.001$），Tukey 法による多重比較の結果，すべての条件間に有意差が見られた（α=.05）。目下条件においては，自己高揚条件，統制条件，自己卑下条件の順に活動性が高く評定されていた。

最後に個人的親しみやすさ得点に関してであるが，呈示方法の主効果が有意であった（$F(2,199)=13.67$，$p<.001$）。Tukey 法による多重比較の結果，自己卑下条件と自己高揚条件の間と，統制条件と自己高揚条件の間に有意差が見られ（α=.05），自己卑下条件の方が自己高揚条件よりも，そして統制条件の方が自己高揚条件よりも高い個人的親しみやすさの評価であった。

考察

本研究では，自己卑下呈示の送り手の立場が，受け手が抱く印象に与える影響を検討するために，送り手の立場と呈示方法とを操作し，受け手（実験参加者）が送り手に対して抱く印象を測定した。

本研究で得られた知見

まず社会的望ましさに関してであるが，送り手の立場が目上の場合の方が，目下の場合よりも社会的望ましさが高いと評定された。これは，シナリオ中の上下関係の操作において目上の送り手を「部の主将」と設定したため，主将という役職が社会的望ましさの認知に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。また呈示方法に関しては，自己卑下を行った場合に最も社会的望ましさが高いと評価されていた。謙遜や自己卑下が日本文化において望ましいことを示してきた過去の研究（村上・石黒, 2005; 村本・山口, 1994; 吉田他, 1982）と同様に，賞賛に対して自己卑下を行うことは望ましい対人印象を与えるのに有効であることが示された。

一方活動性に関しては，呈示方法の主効果がその他の2つの印象得点とは概ね逆の方向性を示した。すなわち，賞賛に対して自己卑下を行った場合，その送り手の活動性は他の呈示方法を選択した場合に比べて低く評定されていた。交互作用効果のパターンも同様の結果を示しており，送り手の立場が目上であっても目下であっても，自己卑下はその他の呈示方法よりも低い活動性評価であった。「意欲的である」，「堂々とした」といった印象を与えたい場合には，自己卑下呈示は逆効果であることが示唆される。

最後に個人的親しみやすさについてであるが，賞賛に対して単に事実のみを返答した場合と自己卑下をした場合との間に差は見られず，自己高揚をして返答した場合にのみ個人的親しみやすさが低く評価されることが示された。この結果から，単に事実のみを返答するといった，自己について積極的に演出しない方法が親しみやすさ評価の獲得には一定の有効性を持つことが示唆される。

今後の課題

本研究では「賞賛に対する自己卑下呈示」場面を用いて，自己卑下呈示の有効性を検討した。今後の課題として挙げられるのは，これ以外の場面での検討である。自己呈示を行う場面はこの他にも数多く考えられ，たとえば自己紹介や性格・人格に対する賞賛など，客観的な基準が存在しない場面では，自己卑下呈示は異なる効果を持つ可能性もあるだろう。

また，本研究では，自己卑下呈示の有効性を規定する要因として送り手と受け手との関係性を取り上げたが，これ以外にも様々な要因が自己卑下呈示の有効性にかかわっていると考えられる。今後は，自己卑下呈示の有効性を規定する要因を整理し，検討していく必要があるだろう。

引用文献

遠藤由美 (1995).「謙遜」―逆説的自己宣伝　立命館産業社会論集, 30, 43-52.

林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 25, 233-247.

稲富 健・山口裕幸 (2004). 自己卑下呈示が受け手に与える印象 ―受け手が認知する呈示者の作為性との関連― 九州大学心理学研究, 5, 201-206.

石黒 格・村上史朗 (2007). 関係性が自己卑下的自己呈示に及ぼす効果　社会心理学研究, 23, 33-44.

村上史朗・石黒 格 (2005). 謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果　社会心理学研究, 21, 1-11.

村本由紀子・山口 勧 (1994). 自己呈示における自己卑下・集団高揚規範の存在について　日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 222-225.

大野敬代 (2006). 謙遜表現の使用条件について 早稲田大学教育学部学術研究 ―国語・国文学編―, 54, 27-35.

吉田綾乃・浦 光博・黒川正流 (2004). 日本人の自己卑下呈示に関する研究：他者反応に注目して 社会心理学研究, 20, 144-151.

吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊 (1982). 児童の自己卑下呈示の発達に関する研究 教育心理学研究, 20, 30-37.